



2026 年 8 月 10 日発行 (季刊)

認定 NPO 法人 市民シンクタンクひと・まち社
〒160-0021 新宿区歌舞伎町 2-19-13 ASK ビル 501
TEL 03-3204-4342 FAX 03-6457-6202
E-mail npo@hitomachi.org
URL : http://www.hitomachi.org
郵便振替口座 00170-6-410791 NPO 法人市民シンクタンクひと・まち社

嫌われた負担増

ひとまち理事・元淑徳大学コミュニティ政策学部教授 鏡 論

先に行われた参議院・衆議院選挙のいずれでも各政党は消費税減税や社会保険料の減額などの主張が並び負担増が嫌われました。

2024 年 3 月に介護報酬の改定があり、介護報酬は平均 1.59% 上がりました。しかし、訪問介護事業は約 2%~3% 下がりました。

制度創設時から訪問介護事業を行っている事業所は少なくありません。すでに職員の高齢と人材不足、移動時間や医療入院や体調不良によるキャンセルなど、不安定要素が大きく小規模の事業所ほど経営が苦しい実情がありました。そこに介護報酬の減額となったのです。多くの事業所で事業継続が厳しくなり、休止や廃止が相次ぎました。その結果、訪問介護事業所自体がない市町村も増えています。

こうした状況に対して様々な団体から反対表明が出されて、多くのロビー活動が進められました。ウイメンズアクションネットワーク (WAN)、高齢社会をよくする女性の会等が 2024 年 9 月や 2025 年 1 月には院内集会を開催し、同時にネット上での参加者も含め、介護保険の改悪に反対する長時間シンポが開催され、多くの関心を集めました。

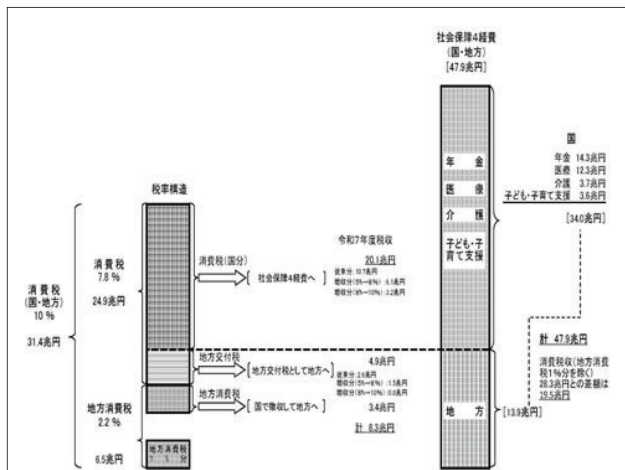
そこで共有されたのは、訪問介護事業所のない自治体が 107 自治体 (2025 年 7 月には 117 自治体に増加) あり、介護保険の基本のサービスである訪問介護事業を使えない地域があること、さらに訪問介護事業所はこれまでもスタッフが集まらない状況が続いており、慢性的な人材不足や高齢化などによる人材不足が喫緊の課題であること、それを介護報酬の減額が追い打ちをかけた事です。職員の処遇改善は重要な課題との認識が共有されました。そうした状況を改善するために介護報酬の見直しが訴えられたのです。

このような状況の中で各種の団体からは介護報酬の改定を都議選や参議院選・衆議院選の争点にという声が上がっていました。今回は訪問介護の処遇改善に言及する政党が現れるという期待感がありました。しかし、現実には各政党から出た公約は減税や社会保険料の減額といった

負担を引き下げる主張でした。介護職員の窮状をいかに訴えても政治の場では、ほとんど無視され、有権者受けの良い減税、社会保険料の減額、給付金が各政党の主張でした。

介護報酬を上げるためには、保険料を引き上げるか、税金分を引き上げるか、保険料を支払う年齢を引き下げるかのいずれかの選択となります。

その意味では、税補填の 50% を 60%、70% に引き上げていく方法は一見都合の良い案のように見えます。一部の研究者も税負担分を大きくすることを主張する人もいます。



しかし、現行の消費税からは既に 3.7 兆円が介護負担部分として組み込まれています。高市政権では消費税を 0% にする議論が続いていました。その他

にも年金、医療、子ども子育て支援の社会保障 4 経費合わせて国・地方含めて 47.9 兆円が賄われています。さらに国費を増やすや 0% にするととなると約 10 兆円の財源を捻出しなくてはならないのです。

政策には当然財政負担が付いてきます。それを嫌うのなら何もしなければ良いのです。しかしそれは、政治が責任を放棄したことにならないでしょうか。

様々な考えがあってそれを調整し、実行するのが政治の役割なのです。本当に必要なものは何か、そのための財源は誰がどう負担するのかを決定するのが政治です。そのための真摯な議論が必要ではないでしょうか。



「タイパ」の時代に、大学で何を学ぶか

小豆川 勝見(しょうずがわ かつみ)

東京大学大学院総合文化研究科 助教
電気通信大学 客員准教授

生成 AI の利用が一般化し、特に若年層の利用率が高いという。ひと・まち社の主な事業である第三者評価事業についても講評を書く際の AI の活用は喫緊の課題となっている。そこで、東京大学で教壇に立ちながら、福島第一原発事故に端を発した放射線量の継続的な測定活動をライフワークとしている小豆川勝見氏から、現代の若者事情と AI の功罪についてご寄稿いただいた。

昨今あらゆる場面で AI という言葉がもてはやされています。AI の目覚ましい進化によって一般事務職やスーパーのレジ打ちといった業種は近い将来不要となるだろう、その流れなのか、AI 万能説のような論調も垣間見えます。

AI は人工知能 (Artificial Intelligence) の略称で、人間のように考えたり、学習したり、機械そのものが判断したりできる、コンピューターの頭脳のようなものです。AI に普段の仕事内容を学習させ、AI 自身で判断できるようになれば、業務によっては仕事を AI に任せられる、ということですね。



申し遅れました。私は東京大学で環境中の汚染物質を研究している小豆川(しょうずがわ)と申します。私の専門は大きくくりでは化学、その中の分析化学という分野です。そのため AI は全くの専門外ですが、普段の研究や教育のあらゆる場面で AI は登場してきます。ここでは特に教育の現場で「学生さんたちが普段どのように AI を活用しているのか」を紹介しつつ、AI の教育効果についても考えてみたいと思います。

「タイパ」を重視する学生

私が所属する学部は、教養学部と言います。東京大学では、入学試験の種類に関わらず合格後は全員が教養学部に入學するという、ちょっと変わった仕組みがあります。教養学部で2年間、基本的な教養を身に付けたのちに、3年生から各々が進学したい学部へ移っていく、という流れです。私はこの最初の2年間の学生さんたちの教育を主に担当しています。

学部1・2年生、年齢で言えば多くが18-20歳です。つまり最近まで高校生でした。長い人生の中で最も体力があり余っている時期ともいえるのでしょうか。もちろん個人差はあるものの、部活の朝練に出て講義を受け、バイトをした後に友人宅で徹夜で遊ぶ、なんてバケモノみたいな活動ができてしまう、そんなころです。

そのような彼ら彼女らが最も重視するのが時間対効果、いわゆる「タイパ」です。できるだけ短い時間で、効率よく成果や満足度を得られることを「タイパが良い」と表現します。対義語は「無駄」でしょうか。学生さんは幼少期から(大事です)でもう一度、幼少期

から)スマホをはじめとした情報機器に囲まれ、SNS やウェブメディアからの膨大な情報の中で育っています。となれば、その中から自分にとって価値があるものだけを効率よく取り込みたい、という欲求は極めて自然なことです。

では彼ら彼女らにとって、教育現場における「タイパが良い」とは具体的に何でしょうか。小中高ととてつもない数の試験や競争を勝ち抜いてきた経歴の持ち主ですから、AI もあつという間に自らの生活スタイルに取り込んで、我々教員が舌を巻くほどの効率の良さをを見せてくれます。たとえば、講義の音声や資料を即座に自分の端末に取り込み、AI で要点を書き出して友人と共有することは、もはや常識に近いと思います。さらにその情報をもとに、試験の予想問題作成、過去問との照合、模範解答の作成などをほぼ瞬時にやってのけます。各自1台以上の端末を持ち歩き、学内の高速ネットワークも充実していますから、ここまでは専門的な知識がなくても日常的に行える作業と言えます。

AI の「功」

AI で講義の要点を作って理解の補助にしたり、分かりにくい内容を解説してもらって学習に役立てたりすること、これは AI の「功」に当たる点だと思います。同じ質問にも怒らず何度でも丁寧に説明



子どもたちに、セシウム137は自然界には存在しないが、核分裂により生み出されることを伝えている

してくれ、初めて習う外国語の発音だって自分の癖を指摘して直してくれる。これは確かにタイパの良い学習方法なのかもしれません。

ここで実際の例をご紹介します。私は放射性セシウムのひとつ「セシウム137」を分析しています。「セシウム137とは何か」をウェブ検索した結果と、AI に「分かりやすく説明して」と指示した解説を、ほぼ同じ文字数で比べてみます。

ウェブ検索(出典:Wikipedia)

セシウム137(英: caesium-137, 137Cs) はセシウ

ムの放射性同位体であり、質量数が137のものを指す。ウラン235などの核分裂によって生成する。

AI(使用AI: Claude Opus 4.8)

セシウム137は目に見えない小さなつぶで、放射線という見えない光を出します。原子力発電所の事故などで外に出ることがあります。

セシウム137に馴染みのない方には、おそらく後者のほうが圧倒的に「とっつきやすい」のではないのでしょうか。「セシウムってどこかで聞いたな、確か原発事故と関係していたような…」という、自分がもともと持っていた情報とリンクしやすい言葉が解説にあることで、初見の単語が頭の中で有機的につながり、理解が進みやすくなる、というプロセスです。

一事が万事この調子ですから、大学で初めて目にする難解な講義の内容も、AIによってあっという間に噛み砕かれ、学生さんたちの頭に消化されていきます。これは強烈にタイパの良い方法なのかもしれません。

余談ですが、大学の教員になるのに教員免許は不要で、教えるスキルが高くない方もいらっしゃいます。(ご記憶ありませんか?この先生、黒板にいったい何を書いているんだろう…という講義…)ただでさえ難解な内容なのに教える側のスキルも低いとくれば、眠気が襲ってくる…そんな講義もありましたよね。そういう場面でこそ、AIはより強力な助っ人になるわけですね。

AIの活用は講義にとどまりません。趣味や資格試験のサポートにもフル活用しているようです。旅行の計画や予想問題はもちろん、もともとプログラミングを趣味とする学生さんとの親和性は特に高く、従来なら数か月かかる巨大なプロジェクトを、ほんの数日で完成させてくるケースもよく見かけます。

AIの「罪」

では、教育現場で感じるAIの「罪」についても考えてみましょう。いくらAIが便利なツールでも、すべてを任せてしまえば自身の成長にはつながりません。ところが、「タイパに合わない」と判断された課題ほど、AIへの「丸投げ」が見られます。

厄介なのは、AIの進化が速すぎて、きれいな文章で整合性のあるレポートが提出されると、丸投げで書かれたのかどうか採点する教員側にも判断がつかない点です。丸投げは論外にしても、「アイデア出し」をAIに任せるのはどこまで許されるのか、では



東京大学内での口頭試問の様子

「てにをは」のチェックはどうか、その線引きを明確にすることは事実上不可能です。大学内の評価においても、AIを使用したのか判定できないレポートなどの提出物よりも、期末試験や対面での口頭試問に評価の重きを置く流れが出来てきています。

このような困惑は国外でも見受けられます。たとえばアメリカのカリフォルニア大学バークレー校ロースクールでは、2026年から授業課題や試験でのAI使用を原則禁止する厳しいルールを学生に課しました。驚くことに、先ほどの「てにをは」のチェックや英訳までもが禁止対象です。世の中がAIを活用していく流れの中ではやや極端にも映りますが、これが奏功するのか注目しています。

ただ、私は座学よりも実習を担当することが多くあります。どんなにAIに手順書を読み込ませても、実際に実験を行うのは学生さんですから、丸投げという手は通用しません。たとえば「熱したガラスは見た目では分からないが、不用意に触ると火傷をする」ことも、実際に手を動かして初めて危険性を理解できます。

AIでは対応できない学び

私が担当する化学実験はもちろん、大学内にはAIでは対応できない学びがたくさんあります。動物実験、解剖、フィールドワーク、対人コミュニケーションなど枚挙にいとまがありません。こうした学習は自らの五感を働かせ、自分の体験として記憶に落とし込まない限り、その学生さんの成長はありませんし、資格も取れないかもしれません。AIで効率よく回すことが、そのまま成長につながるわけではないのです。AIの進化とは別に自らの技量を磨くためには、自らの頭に叩き込み、整理して手を動かして自分の「もの」にしなければなりません。このことがどれほど大切なことなのかきちんと伝えていくこと、これは「タイパ」に逆行するようにも見えますが、教育の現場にいる私たちにとっても喫緊の課題なのかもしれません。

ここまで、私の狭い視野からAIの功罪について述べてきました。決して広く適用できる話ではないと思います。ただ一つ間違いないのは、AIは極めて速いスピードで進化を続けていて、現在はその通過点に過ぎないということです。1年後にはまた違う景色が広がっているかもしれません。そのとき私たちが同じ感覚でAIと向き合っているのか、まるで想像が付きません。

拙い文章をお読みいただき、ありがとうございます。実はここまでの文章、私の普段の仕事内容をAIに学習させて、すべてAIに書かせていた…と聞いたら驚くでしょうか。…もちろん冗談ですが、近い将来、この程度のことはきっとどこにでも起こりうる話だと思っています。

評価室活動報告

第三者評価事業は年度当初より問い合わせが多く、7月末までの契約数は年間目標の8割に達しました。問い合わせにはプロポーザルへの参加依頼もあり、児童養護施設や乳児院など、複数の社会的養護関係施設の受託につながっています。

ひと・まち社に所属する評価者は現在28名です。毎年受託目標をたてて、評価者は2件～6件の事業所を順次評価しています。現職の仕事に携わりながら活動する評価者も複数います。今年度の受託目標は40件です。評価は1件2～4名でチームを作り、助け合っています。私たちは、利用者聞き取り調査では、利用者の声を丁寧に聞き、サービスに対する利用者の

感想を事業所に届けています。また、事業所情報をできるだけ多く集めて、評価者間で複数回の合議を行い、事業所が「課題」に気づける報告書づくりに努めています。ひと・まち社は合議を多く行いますが、何より、その効果を大きく感じているのは評価者で、新人評価者もベテラン評価者も安心して評価を実践しています。

今年は評価者養成講習に2名を送り出すことができました。ひと・まち社では引き続き評価者を募集します。介護、保育、障害者支援などに3年以上従事していた皆様、評価を通して「利用者本位の福祉サービスの実現」を目指しませんか。ご連絡をお待ちしています。

「介護保険・介護予防に関する調査」出前報告会開催 ～多摩・生活者ネットワーク福祉部会主催～

6月21日、鏡諭理事（元淑徳大学コミュニティ政策学部教授）と多摩・生活者ネットワークに出向き、「介護保険・介護予防に関する調査報告」を行いました。市議会議員の岩崎みなこさん、岸田めぐみさん、さとうみずほさんを含め福祉部会のメンバー10人の参加がありました。



鏡さんから「介護保険制度の現状と嫌われた負担増（進まない介護保険の改善）」と題して、制度の現状を紐解いていただき、年金や医療などの社会保障費に充てられている消費税減税についても言及がありました。ひと・まち社からは調査報告書・全体の概要版に加え、多摩地域の4種類（訪問介護事業所3所・利用者調査7人・地域包括支援センター5所・自治体調査）の調査データを報告しました。

報告会では介護サービスが生活に浸透しているものの訪問介護事業所の運営は厳しく、介護職の給与は賃金構造の平均より7万円も低いままであること、介護職の人材不足が続いていることなど、データとともに共有しました。介護サー

ビスの充実や介護職の基本報酬を上げれば保険料に影響することから、今後、自分たちがどのような福祉を求めるのか、負担と給付について考える土壌を作る必要があります。

参加者から、たすけあいワーカーズを32年間続けてきてやりがいには非常にあったが、今の報酬体系では若い人が集まりにくいと思うとの意見がありました。介護士は高齢化し、若い人も集まらず、人材不足のままで担い手の見通しがつかない訪問介護事業所の厳しい現実が見えました。報告会を通して、介護職の処遇改善、基本報酬の引き上げは急務の課題として取り組む必要があることを実感しました。また、地域の課題とともに介護士の生活向上に向けた支援策などを自治体に働きかけることができることを共有しました。自治体独自の支援策が必要であることを確認した会になりました。

調査結果を基に、自治体の課題を共有する【出前報告会】を是非ご活用ください。お声掛けをお待ちしています。

ひと・まち社代表理事 工藤春代

「介護保険・介護予防に関する調査報告書」を一部1,000円にてお分けしています。

お問い合わせはひとまち社
Tel 03-3204-4342 まで

介護保険・介護予防に関する
調査報告書

2024年7月～10月

介護保険・介護予防に関する調査報告書

メールアドレス登録のお願い

ひと・まち社ではSDGsの取り組みとしてペーパレスをすすめています。今後の機関紙「ひと・まち」の電子データでの発信をすすめています。通信購読をご希望の皆様にはメールアドレスのご登録へのご協力をお願い致します。npo@hitomachi.org

ひと・まち社へのご寄付をお願いいたします

振込先口座

特定非営利活動法人市民シンクタンクひとまち社

三菱UFJ銀行 新宿中央支店 普通 5298170

編集後記：スマホを開いたら、いつの間にかAIが「返信の提案」、「話題の提供」、「ムードの分析」などと懇切丁寧に問いかけてくる。「君は私に何をさせたいの？」と逆に聞きたくなってしまった。小学生にAIのことを聞くと、「悩み事相談に乗ってくれるなら友達要らないね」と、子どもは抵抗感がないらしい。子どものうちは友達と一緒に身体を使って滑ったり転んだり、泣いて笑って、たくさん楽しいことも嫌なことも経験して育ってほしいと思う。(K)